

【古文の通釈】

今となつては昔のことだが、比叡山^{ひゑさん}に僧^{そう}がいた。とても貧^ひしかったが、鞍馬寺^{くらまでら}に七日間お参りした。夢^{ゆめ}（のお告げ）などが見えるかと思つてお参りしたが、見えなかったので、さらに七日と思つてお参りしたけれども、やはり見えないので、七日を何度も延ばして百日お参りした。その百日目の夢に、「自分にはわからない。清水寺^{しみずでら}へ参れ」とおっしゃると見たので、明るる日より、また清水寺へ百日お参りすると、また、「自分にはわからない。賀茂神社^{かもじんじ}に参つて申し上げよ」と夢に見たので、また賀茂神社にお参りする。

七日と思つたけれども、例^{れい}の夢を見ようとお参りするうちに、百日目という夜の夢に、「おまえがこのように参るのが、気の毒^{へいじん}なので、御幣紙と、打撒^{うちまき}の米^{こめ}くらいの物を、間違いなく与えよう」とおっしゃると見て、ふっと日が覺めた感じは、とてもつらく、しみじみと悲しい。あちらこちらお参りして歩いたのに、結局このようにおっしゃるよ、打撒の米の代わりだけをいただいて、何になろうか、いや、何にもならない。私の山へ帰り登るのも人目が恥^{はづかし}ずかしい。賀茂川に飛び込んでしまおうかなどと思つたけれども、やはりそうはいっても身を投げることもできない。

どのようにお取り計らいになるだろうかと知りたいところもあるので、もとの山の僧坊^{そうぼう}に帰つて、座っていると、つきあいのある人の所から、「お尋ね致します」と言う人がいる。「どなたですか」と見ると、白い長櫃^{ながびつ}を担いで、縁側^{えんがは}に置いて帰った。とても不思議に思つて、使者を捜したが、全然見当たらない。これを開けてみると、白い米と良い紙を長櫃一杯に入れてある。これは見た夢のままだつた。いくらなんでもとは思っていたが、これだけを本当にくださったのだと、とても情けなく思つたけれど、どうしようもないと思つて、この米をいろいろなことに使つと、ちょうど同じ多さで、尽きることがない。紙も同じように使つたけれど、なくなることがなくて、たいして特別にきわだつてはいなかつたけれど、とても裕福な法師になったそうである。

やはり、気長にお参りをするべきである。

【古文の通釈】

一休^{いっしゅう}が塙^{はな}へ行かれた時、淀^{よど}の河瀬舟^{かせふね}に乗りなざつたところ、その舟に乗り合わせた人に山伏^{やまふし}がいたが、「御僧は何宗であるか」と問う。一休が「私は禪宗である」とお答えになると、「禪宗には我らのような、奇特はないだろう」と言つた。一休が申されるには、「まことに奇特は多い。そちらも何でも奇特があるのなら、見せてください」とおっしゃつたので、「よし、私の法力で、この舟のへさきに不動明王^{ふどうめいおう}を祈り出してお目にかけよう」と、一にこんがら二にせいたか（と唱えること）を始めて、数珠^{じしゆ}を激しくこすり合わせて祈つたところ、乗り合わせた一同が、目と目を見合わせていたところに、思つたとおりの舟のへさきに、すぐさま不動明王の像が、火炎^{くわえん}を放つて現れた。その時山伏はしかめっ面をして、「皆さん拝みなさるか」と申したので、そこにいる人全員が不思議な思いになつたけれども、一休は全然不思議そうでいらつしやらない様子である。「どうだ禅僧、このような奇特はどのようになさるのか」と、慌ただしく詰め寄つて申し上げると、「私の奇特は、体から水を出して、あの火炎を放つ不動明王を消して見せよう。精一杯祈りなさい」と言つて、その不動明王の像の火炎に、小便をたくさんかけなざつたところ、火炎はそのまま消えて、山伏の法力が尽きたので、人々は皆一休を拜んで、不思議に思つたということだ。